

パルメニデス断片2における「非有」の問題

山 川 偉 也*

断片2の冒頭において教導の女神は、探究されうべきただ二つの道がある、とパルメニデスに告げる。ひとつは「(それは)ある」そして「(それが)あらぬ(こと)は不可能」とする道であり、他は「(それは)あらぬ」そして「(それが)あらぬ(こと)が正当である」とする道である、と言う。断片2は「真理の道」に入るための根本条件をなすものとして決定的に重要である。原文を掲げておこう。

ἡ μὲν ὁπῶς ἔστιν τε καὶ ὥς οὐκ ἔστι μὴ

εἶναι, (2.3)

ἡ δ' ὥς οὐκ ἔστιν τε καὶ ὥς χρεῶν ἔστι

μὴ εἶναι (2.5)

さてしかし、ここで女神の言う「ある」(エステルニ *ἔστιν*) のアイデンティティーは何か。その主語は(もしあるとすれば)何か。その「ある」は、述語的なそれであるのか。それとも「存在的」なそれであるのか。「2は整数である」の「ある」と、「整数2がある」の「ある」とでは、それぞれに「ある」の意味が違うと言わなければならない。それとも、その「ある」は、「明けの明星は宵の明星である」の「ある」の場合のように、等しさ(equality)のそれであるか。あるいはむしろ「 $2+2=4$ であるは真理である(=成り立つ)」といった場合のそれ、つまり“veridical”なそれであるか。それとも、それらの「ある」がすべて一体となって混融した(“fused”)かたちで用いられているのか。あるいはむしろ、ただ、それらすべてが、ただ「混乱した」(“confused”)意味で使われているにすぎないのか。

ひとはこれらの問題にかかわって、パルメニデス解釈における現代の最先端の見解を、ファースやカーンの論文に見出だすことになるだろう。

ところで、最近の論文「パルメニデス解釈における若干の代替物」においてムーレラトスは、1960~70年代アングロ・サクソン系パルメニデス研究者の間では、パルメニデス研究に関する次の合意事項が成り立っていると指摘した。要約すると

- A 断片2においてパルメニデスは、意識的に「エステルニ」の主語を隠している。その主語は、議論の展開につれて徐々に特定化されていく。
- B 「あらぬ」が禁じられるのは現実的对象への意味論的言及に失敗するゆえである。
- C パルメニデスは存在と述語の「ある」を混同していない。
- D 「エステルニ」「エイナイ(《ある》の不定詞)」は、種々の文脈にあって、事柄・事態を値域 domain とする“fused”ないし“veridical”な用いられ方をしている。

というのがその合意事項だと言う。

さて、これらの合意事項を前提すると、以下に示すごとき「標準的パルメニデス解釈」なるものが成り立つ、とムーレラトスは主張する。そのエッセンスを提示しよう。いま“ α ”によって「 α なる事態」をいうとすれば、

- I 「“ α ”はあらぬ」という文は、“ α ”に言及しえないゆえに不成立である。
- II 「 x はあらぬ(存在的)」「 x はFであらぬ(述語的)」は、いずれもIに還元される。
- III 「 x は y と同じであらぬ」も同様。
- IV 「 x は y と異なる」は「 x は y と同じであらぬ」を前提する。
- V ゆえに、「万物は一」を主旨とする一元論が帰結する。

以上である。

こうして例えば『テアイテトスは飛んでい

*本学文学部

る』(という事態)はあらぬ」という文は、その事態への言及に失敗するゆえに不可能であり(I),「ペガサスはあらぬ(存在しない)」も「ピカソは哲学者であらぬ(ない)」も同様(II)「 $2+2 \neq$ (あらぬ)5」も同様(III),「宵の明星と明けの明星は異なる(同じであらぬ)」も同様(IV)……という次第になる。

それゆえ、もしもこの世界におよそ何物かXとYがあり、それぞれに言表され思惟されるとすれば、それらXとYは、同じものであり、こうして、「万物は一である」が帰結することになる。これは、ヘラクレイトスの「万物は一である」の向こうを張った「世界ノッペラボー[万一]論」である。

この「標準的パルメニデス解釈」はそれなりに明晰かつ経済的である。しかし、ムーレラトスはその欠点を次のように指摘する。すなわちこの「標準的」解釈は

- (1)パルメニデス以前の思索との有意義な連関を考慮せず、
- (2)限られた証拠をしか利用(断片2, 断片2, 断片2, 1~2行)せず、
- (3)特にパルメニデス固有の叙事詩的イメージ・神話的形姿をまったく重視せず、
- (4)「真理の道」と「隠見の道」の明確な対照を役立てることをせず、
- (5)「XはYと異なる」なら「XはYではない」とする推論がパルメニデス断片にごくルーズにしか対応しない、

と。そして、これらの欠点を可能なかぎりカバーすると称する代替理論を提出する。

その代替理論の主旨は、問題の「エスティ」を徹底して述語的なそれと解し、それを命題関数“ ϕx ”, つまり“ ϕx ”の“is”に相当するとなすものである。すなわち彼は断片2当該箇所を
The positive route (B2. 3): “__ is __ and it is not possible that should not be __.”

The negative route (B2. 5): “__ is not __ and it is proper that should not be __.”と読むのである。

この読みに従えば、探究の二つの道における

「()は()である」および「()は()であらぬ」の主語および述語は意識的に隠されていて、探究されるものが言及されるそのたびに、それぞれの空白部分に一定の主語と述語が充填されるということになるだろう。

ところでしかし、その場合、「()は()であらぬ」のほうはどうなるであろうか。「XはYであらぬ」と、わたしが言うとき、「え? で、どうなの」と、あなたは聞き返すだろう。

「XはYであらぬ」というわたしの発言は、完結せず、曖昧で、情報不足だからである。「精神は肉体ではあらぬ」と言われてもあなたは満足しないだろう。「え? それじゃ何なの」と、あなたは聞き返すだろう。二者択一的探究の道の候補のうち、「()は()であらぬ」のほうは、決定的な欠点を内包しているわけである。というのも、あなたが例えばオデュッセウスのようにイタカをめざして旅立つとすれば、あなたは海図を眺め、コンパスを使い、あるいは星を眺めるなどして、ついには当地に辿り着くことを期待しえよう。が、もしあなたが「イタカならぬ」ところをめざすとすれば、あなたは、目当てのない目当てを目当てにして旅するわけで、とまどい迷うばかりであろう。ちょうどそのように、「XはYでも、Zでも……いかなるものでもあらぬ」と言われる場合の「何物でもあらぬもの」(断片6.2)については、いかなる探究の方途も立たないということになるだろう。こうして、断片2.5における「あらぬ」の道は、探究するべからざるものへ導くものとして却下されなければならなかったのである、と。

3 この解釈が示唆に富み、整合的なものであることをわたしは認める。しかし、それは、「……これもまたひとつのパルメニデス解釈である」という意味においてである。わたしが不満とするところは、断片8におけるパルメニデスの言葉、「これらについての判定($\kappa\rho\lambda\omicron\iota\varsigma$)は次のことにかかっている。すなわち《あるかあらぬか》」(断片8.5-6)を、断片2,断片3,断片6との関連において十分に考慮していないと思われる点である。パルメニデスの思惟を根本

から規定しているのは排中論理である、とわたしは信ずる。事実、断片 2.3 と 2.5 は、相互に排中的に対立する。これら二つの道については、いずれか一方のみが成り立ち、他は成り立たない。そして、断片 3 により思惟しえないものはあり（成り立ち）えない。「あらぬ」は思惟しえず、したがって第一の道のみが残ることになる。

さて、わたしは以下に、パルメニデスの思惟の方向にいつそう忠実だと思われる方向で、《標準的解釈》の改訂版を構成してみよう〔以下の構成は基本的に Pelletier (p. 20) のそれに近い〕。

- I ひとつの言明は、それ自身が有意味であるかその否定が有意味であるか、いずれか一方のみである（断片 2）。
- II 言明の意味は、その言明によって言及され・思惟されうる事態である（断片 3）。
- III 事態は、それが事態としてあるとき、言及されうる（断片 6）。

こうして例えば“ α ”については、I により、「 α である」という言明と「 α であらぬ」という言明のうちのどちらかが有意味でなければならぬことになるが、III により、 α であらぬ事態は確定した事態として成立していないから言及することも思惟することもできず、したがって、II により無意味ということになるのである。テアイトスが飛んでいないとすれば、テアイトスが飛んでいるという事態はない。だから、III により、その「ない [= あらぬ]」事態に言及し思惟することは不可能なのである。したがって II により、「テアイトスは飛んでいない」という言明は意味をもたないことになるのである。

こうして、「あらぬ」事態については一切の言及・一切の思惟が不可能になるが、そのことは、存在的な意味での「あらぬ」についてのみ当てはまることなのではない。

例えばいま仮りに、非常に寛容な存在論的見解の持ち主プラタゴラスが、一切の対象物を「ある」と「あらぬ」の二つのカテゴリーに選り分ける作業をやっているとしよう。彼は二つ

の箱を用意し、上の箱には「ある」ものの名をすべて投げ込み、下の箱には「あらぬ」ものの名をすべて投げ込んでいるとしよう。すると、それら二つの箱は、例えば次のようになるだろう。

| |
|----------------------|
| 宮沢リエ, 貴の花, 原子, |
| 雌牛, 机, ノート, |
| あくびしている犬, |
| 落下中の石, |
| |
| |
| |

| |
|------------------------------|
| ペガサス, キマイラ, クローン人間 |
| ハンサムなソクラテス, |
| $2 + 2 \neq 4$, 丸い四角, |
| |
| |
| |

さて、この無邪気な作業を見守っていたパルメニデスが口を挟む。

「ペガサス？ きみはペガサスを『あらぬ』ものに分類するわけだ。したがって、それはあらぬわけだ。ところであらぬものは、これを思惟することも言及することもできはしない。したがって、プラタゴラス君、きみはまったく無駄な（無意味）ことをしているのだ」

と。

むっとしたプラタゴラスが抗弁を試みるだろう。

「いや、なにもパルメニデス。わたしは、無駄なことしてるつもりはおまへんで。ペガサス、こりゃ、たしかに、実際にはおまへんわな。そやかて、あれへんもんも。この世のなかには仰山おましてな。キマイラかて。クローン人間かて。ハンサムなソクラテスカて。ほんまにはおまへんわ。な、そ

うでっしゃろ。ハンサムなソクラテスはなんて、聞いたことがありまへんもんも。そやけど、そういうほんまにあらへんもんも、ありまんのや。仰山ありまんのや。なんでって、その証拠に、ペガサスとキマイラは違うし。キマイラと丸い四角も違うわけですさかいな。えっ、そうでっしゃろ。違うということは区別できるっちゅうことでっしゃろ。で、区別できるっちゅうことは、有るっちゅうことですがな。ないもんを、せんせ、区別できまっかいな」

するとパルメニデスは次のように問うだろう。

「きみは、それらのあらぬものが、区別できると言う。では、どういうふうにして、きみはそれらを区別するのかね？ ぜひ、教えていただきたい。それらが実際にあらぬのなら、きみは、それらのあらぬものを、『これが』とか、「あれが』とか、指示することができないはずだがね？」

と。プラタゴラスはいささか閉口しつつも、こう答えるだろう。

「わたしゃね。……えー……、ペガサスとかキマイラとかの『観念』について言うとするんでしてね、ほんまにない、そのないものそのものについて、言うとするわけではおまへんのや。つまりでんな、ペガサスの観念とキマイラの観念とは。こりゃ、たしかに違いますわな。で、まあ、そういうわけで、ちゃんと区別できるっちゅうことですわ」

しかし、パルメニデスは容赦しない。彼はさらに質問をつづけるだろう。

「プラタゴラス君、観念というのは、なにかの観念、つまりなにか『ある』ものの観念であるのか、それとも『あらぬ』ものの観念であるのか。およそなにかあるものの観念があるかぎり、その観念は、存在する何物かの観念であって、あらぬもの、無の観念ではないのではないか、どうだね？」

「えっ？ ま、そうでっしゃろな」

「すると、『ペガサス』なる観念は、ペガサスの観念なのだね？」

「ま、あんたはんがお好きなようにしなは

れ」

「ペガサスは、きみの考えによれば、ほんとうにはあらぬものだったね？」

「ほんなこと言いましたかいなね？」

「言ったね。だから、あらぬものについての観念というのが、きみの考えによると、あることになるのかね？ さきほどきみは、観念とは『ある』ものの観念であると認めたのだったが」

「……」

こうして、「あらぬ」ものを分類するために用意されたプラタゴラスの箱は無用の長物となる。

当然、プラタゴラスは甚だ気分がよろしくない。すると、これを慰めるかのようにパルメニデスは言うだろう、

「いいのだ、プラタゴラス君、きみがもし、ペガサスが存在すると思うのだったら、それを『ある』ものの箱のほうに入れたまえ。ぼくはいっこうに構わない。しかし、きみが気前よく『ある』ものの箱のなかに投げ入れたもの、それらが相互にどのように区別されるのか、それだけはどうか教えてもらいたいものだ」

と。すると、ふたたびプラタゴラスはむっとして言うだろう。

「あんたはんは、あきれたおひとやな、ほんまに。あんたはんには貴の花と宮沢リエが違うのが分からしまへんのか」と。

さて、この後の対話は次のように進むだろう。

「すると、きみの考えによると、貴の花と宮沢リエは異なるわけだ」

「当然でっしゃろ」

「したがって貴の花と宮沢リエは同じであらぬ」

「ふん、ふん、ふん」

「だからまた、貴の花は宮沢リエではあらぬ」

「ふん、ふん」

「したがってまた、貴の花が宮沢リエであるという事態はあらぬ」

「ふん……」

「すると、それに言及することはできないはずだ」

「……」

「だから、『貴の花と宮沢リエは異なる』と主張することにおいて、きみはなにか意味あることを言っているのではなくて、無意味なことを言っているのだ」

こうして、およそ「ある」と言われる一切のものが無差別に同一となってしまう、万有ノッペラボー論が完成する。

断片 2 ならびに断片 3 の解釈をめぐる、これまでに夥しい量の研究論文が提出されてきた。いかなるパルメニデス解釈も断片 2、断片 3 ならびに断片 6 との関係において断片 8 をいかに読み解くかによって、その立場ならびに質を決定的なものにしてしまうからである。ここに、わたしが読んだもののうち重要だと思われるパルメニデス文献を、外国のもの、しかも比較的最近のものにかぎって掲げておくことにする。

Austin, Scott., *Parmenides: Being, Bound, and Logic.*, Yale University Press, 1986.

Barnes, Jonathan., "Parmenides and the Eleatic One." *Archiv für Geschichte der Philosophie* 61 (1979), pp. 1-21.

Burnyeat, Myles, "Idealism and Greek Philosophy: What Descartes Saw and Berkeley Missed." *Philosophical Review* 91 (1982,) pp. 2-40.

Coxon, A. H., *The Fragments of Parmenides: A Critical text with with introduction, translation, the ancient testimonia and a commentary.*, Van Gorcum, 1986.

Fränkel, Hermann., *Dichtung und Philosophie des frühen Griechentums* (2nd ed.), Munich: ch. Beck, 1962.

Furley, David., "Notes on Parmenides." in Lee, Mourelatos and Rorty (ed.), *Exegesis and Argument.*, pp. 1-15.

Furth, Montgomery. "Elements of Eleatic Ontology." *Journal of the History of Philosophy* 7 (1968): pp. 111-32., Reprinted in Mourelatos, A. P. D. (ed.), *The Pre-Socratics: A Collection of Critical Essays.* Garden City: Doubleday, 1974, pp. 241-70.

Gallop, David., *Parmenides of Elea., Fragments, A Text and Translation with an Introduction.*, University of Toronto Press, 1984.

Kahn, Charles H., "The Thesis of Parmenides." *Review of Metaphysics* 22 (1968/69), pp. 700-24.

Kahn, Charles H., "More on Parmenides." *Review of Metaphysics* 23 (1970), pp. 333-40.

Mackenzie, Mary Margaret., "Parmenides' Dilemma." *Phronesis* 27 (1982): pp. 1-13.

MacColl, John., "On Avoiding the Void", *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, vol. IX' 1991, pp. 75-94.

Mourelatos, Alexander P. *The Route of Parmenides.*, New Haven: Yale University Press, 1970.

Mourelatos, Alexander P. D., "Some Alternatives in Interpreting Parmenides." *The Nonist* 62 (1979), pp. 3-14.

Nussbaum, Martha., "Eleatic Conventionalism and Philolaus and the Conditions of Thought." *Harvard Studies in Classical Philology* 83 (1979): pp. 63-108.

Pelletier, F. J., *Plato, and the Semantic of Not-Being.*, The University of Chicago Press, 1990.

Robinson, T. M., "Parmenides on the Real in its Totality." *Monist*, 62 (1979)

Schofield, Malcolm., "Did Parmenides Discover Eternity?" *Archiv für Geschichte der Philosophie* 52 (1970): pp. 113-35.

Stokes, Michael C., *One and Many in Presocratic Philosophy.*, Cambridge: Harvard University Press, 1971.

Tarán, Leonardo., *Parmenides.*, Princeton Press, 1965.

Woodbury, Paul B., "Parmenides on Names." *Harvard Studies in Classical Philology* 63 (1958): pp. 145-60.

「ことばと論理」研究会
1993. 3. 18 伊豆下田にて発表

追記 本稿は、日本私学振興財団の平成4年度
学術研究振興資金による研究の一部である。